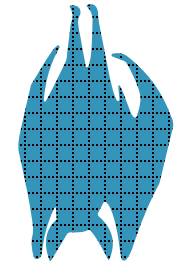




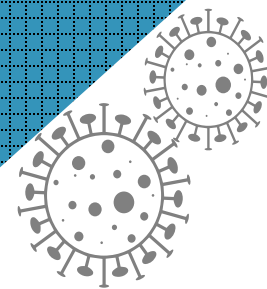
第12期社会工学会アジアドYNAMISM班



「パンデミックの ユーラシア史と ポストコロナ」

～モンゴル帝国史を起点としたペスト(黒死病)の欧州と日本の中近世史～

学 部 生	:	柳 沢	小 出	生 田	桑 原	池 田	古 川
大学院生	:	半 田	北 山	三 田	山 内		
修 了 生	:	光 永	塚 原	和 泉	成 田		
指導教員	:	金 美 徳	水 盛 涼 一				



目次

1

論文の構成

問題意識、論文の章立て

2

研究内容

各パート研究報告

3

フィールドワーク

報告、実施予定

4

参考文献

書籍、論文

問題意識（まとめ）

1. モンゴル帝国とパンデミック

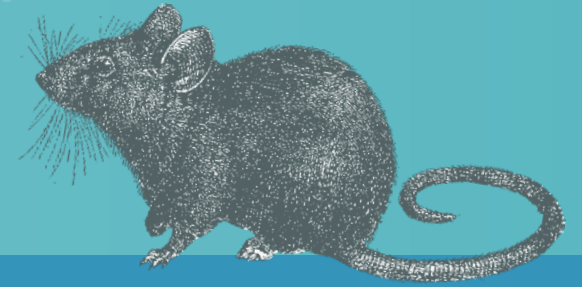
- ①ウイルスや細菌との共生と国家維持の間に相関はあるか（半田）
- ②モンゴル帝国内の感染が引き起こした変化とは（生田）

2. 欧州のパンデミック

- ①ペスト（黒死病）の感染拡大の原因と対策（池田）
- ②ペスト（黒死病）後の人口減少の影響と、社会構造の変化について（三田）
- ③宗教・芸術・ユダヤ人迫害に見るペスト（黒死病）前後の欧州人の心性の変容（小出・桑原・北山）

3. パンデミックの日本への影響

- ①日本の神仏信仰と疫病の関連性（山内）
- ②日本における貿易・経済と感染症（柳沢・光永）
- ③感染症と日本人の思想・心理（古川）
- ④日本の科学技術・産業発展と感染症（光永）

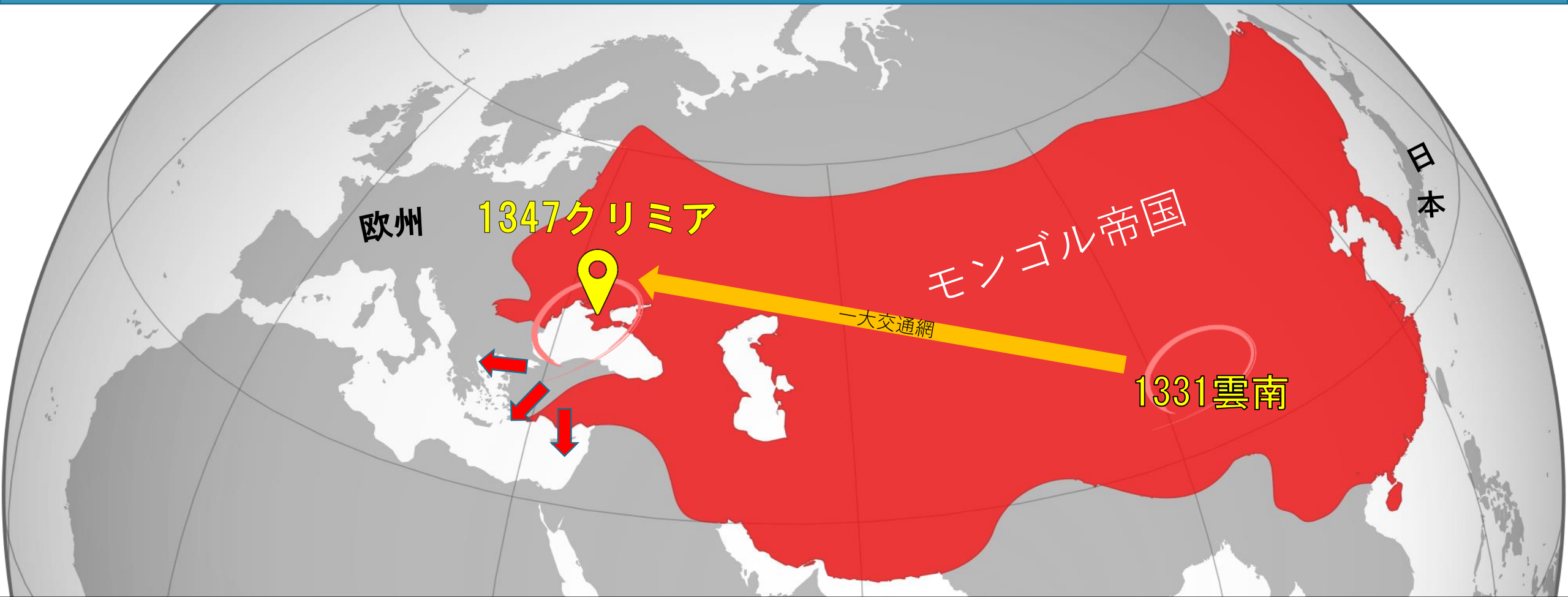


研究報告

1. モンゴル帝国とパンデミック



アジア・ユーラシアを横断したペスト(黒死病)



「900～1200年にユーラシア陸路海路にて東西交流が進む。

モンゴル帝国最盛期1279-1350年は長距離移動の隊商や軍隊などが往来する 1 大交通網が完成
1331年中国から1347年クリミア、そこから船でヨーロッパと中東のほとんど全ての地域に侵入」

ペスト(黒死病)とジャムチについて(2018の応用)

ジャムチ(站赤・驿站)とは

- ・駅伝制・駅のこと(現代のSAのよう)
- 馬や宿舎が用意され、情報伝達手段へ
- ・通政院(位:従二品)
- モンゴル高原のジャムチを管理する機関



東から西への感染

- ・それはどのような状態だったか
- 「隊商たちの常設の宿泊所はどこでも、何十何百という旅人やラクダを食わせるために、食料を同等多量に貯蔵していたから、それを目指して集まったネズミとネズミにたかるノミもおびただしく生息していたに違いない。(マクニール)」
- ・どのような気候だったか、どれぐらいの人々が利用していたかを調査する⁶

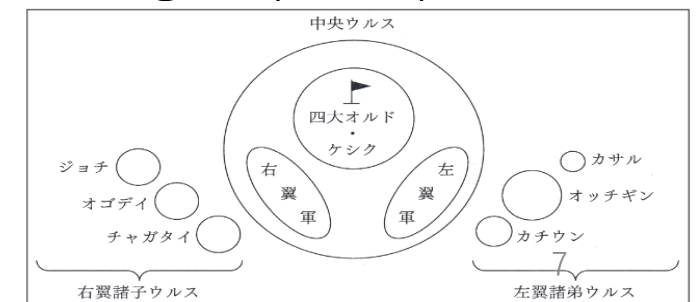
ペスト(黒死病)に関連した軍事行動と組織

ペストと軍事行動

- ・オゴデイの次子の軍が1239年頃にチベットに侵攻
- ・モンケカーンが1253年頃雲南、大理国に遠征
- ここでペストの寄生バランスが崩壊したといわれる
- ・クリミア半島カフファでの包囲攻撃に、生物兵器としてペスト感染者の遺骸が使用される
- 船でヨーロッパ各地へ(1347年)

ペストと組織

- ・モンゴル帝国の組織は、ティール組織(信頼に基づいた組織)に似ている～(2018)
- ティール組織は、新型コロナにどのような対策を行っているのか
- モンゴル帝国がペストに対してどのような変化をした？



モンゴル帝国と明朝



明(王朝) A.D.1368～A.D.1644

漢民族の中国の王朝。紅巾の乱で頭角を現した朱元璋が1368年、金陵(のちの南京)を都として皇帝位につき、元号を洪武と定めて明を建国(洪武帝)

元朝の勢力をモンゴル高原に追いやり(北元)、江南を根拠地として中国統一

中国固有の論理で国家建設した
社会の隅々まで統制
謀反(むほん)や汚職を弾圧
地主を任命し相互に監視する社会
秩序維持のための法による強制

→ つまり超封建的な社会により秩序を作った

- ・モンゴルは明に再び進行できず(ペスト影響もあるか)
- ・明もモンゴルに進行するも勢力を拡大するには至らず、ある領土を維持した



朱元璋(洪武帝)1368年～1398年

モンゴル帝国と明朝～人口からみる～

元代の登録戸数と登録人口

年号(西暦)	廟号	登録戸数	登録人口	文献
中統元年(1260年)	世祖	1,418,499 戸	推定 900 万人	新元史
至元二十七年(1290年)		13,196,206 戸	58,834,711 人	元史
至元二十八年(1291年)		13,430,332 戸	60,491,230 人	元史
至元三十年(1293年)		①11,633,281 戸 ②14,002,760 戸	①53,654,337 人 ②推定 6300 万人	① 元史・卷十七 ② 元史・卷九十三
至順元年(1330年)	文宗	13,400,699 戸	推定 6000 万人	元史

元の時代の1330年推定人口は6000万人

ペストが中国に侵入したのは1331年
世界に蔓延したのは1347年

元から明に変わったのは1368年

明代の登録戸数と登録人口 <https://ameblo.jp/rimdom/entry-12541158361.html>

戸口	戸 数			口 数		
時間	14 年 (1381)	24 年 (1391 年)	26 年 (1393 年)	14 年	24 年	26 年
直隸	1,935,045	1,876,638	1,912,833	10,241,002	10,061,873	10,755,938
浙江	2,150,412	2,292,404	2,138,225	10,550,238	8,661,640	10,487,567
江西	1,533,924	1,566,613	1,553,423	8,982,481	8,105,610	8,982,481
湖广	785,549	739,478	775,851	4,593,070	4,091,905	1,702,660
福建	811,369	816,830	815,527	3,840,250	3,293,444	3,916,806
四川	214,900	232,854	215,719	1,464,515	1,567,654	1,466,778
广东	705,632	607,241	675,599	3,171,950	2,581,719	3,007,932
广西	210,267	208,040	211,263	1,463,119	1,392,248	1,482,671
云南		75,690	59,576		354,797	259,270
北平	338,617	340,523	334,792	1,843,403	1,980,895	1,926,595
山东	752,365	720,282	753,894	5,196,715	5,672,543	5,255,876
山西	595,240	593,065	595,444	4,030,454	4,413,437	4,072,129
河南	314,785	330,294	315,617	1,891,087	2,106,991	1,912,542
陕西	285,355	294,503	294,526	2,155,001	2,489,805	2,316,563
合計	10,645,362	10,684,435	10,652,789	59,873,305	56,774,561	60,545,812

材料来源：洪武 14 年、24 年《明太祖实录》卷 140、214、26 年数字来自章潢《图书编》卷 90

明の時代の1393年推定人口は約5000万人



明の時代はペスト蔓延と重なる

例え戦争でモンゴルがいかに惨忍としても
これだけの人口減少が起こるだろうか
(マクニール、バーンスタイン)

剣よりも病原菌の方が致死率の高い兵器とも考えられる。

モンゴルは北に撤退へ

モンゴルを追い出せた理由に感染症は関係したか？

明も減ったが、モンゴルはもっと深刻だったか
モンゴルが残忍だったとしても、明にこれほどの人口の減少が生じるわけではない。
(モンゴル側に資料はない、明は元の資料を焼き捨てた)

- ・閉鎖的で流動性低い明の政策がモンゴルを追い出すのに功を奏したか？
- ・中華の確立と発展に寄与したか？
- ・ペスト下でモンゴルは衰退し、明は国家を強くできた
- ・自由主義と社会主義
- ・疫病のコントロールと国家(組織)維持
→現代とつながる話題ではないか



研究報告

2. 欧州のパンデミック



「欧州のパンデミック」問題意識

- ①ペスト(黒死病)の感染拡大の原因と対策(池田)
- ②ペスト(黒死病)後の人口減少の影響と、社会構造の変化について(三田)
- ③宗教・芸術・ユダヤ人迫害に見るペスト(黒死病)前後の欧州人の心性の変容(小出・桑原・北山)

ペスト（黒死病）の感染経路

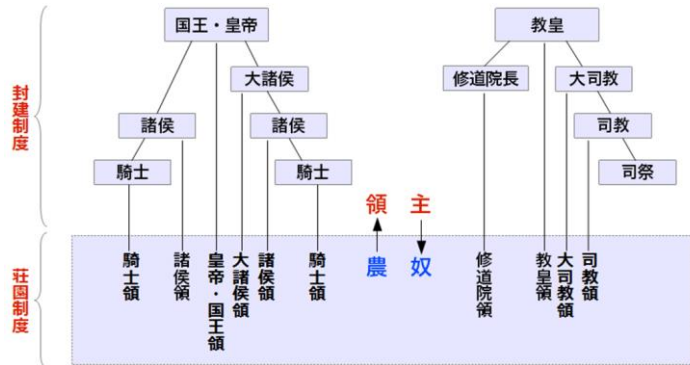
黒死病の感染経路

出典：The National Interest (2018)



ペスト（黒死病）後の人口減少の影響と社会構造の変化

- ・14世紀のヨーロッパは封建社会であった
- ・この封建社会を支えていたのが、「封建制度」と「荘園制度」であり、力関係は領主＞農奴であった



出展: クリエイティブ・コモンズ「表示-継承 (CC BY-SA)」

- ・ペスト(黒死病)から生き残った人々へ資産移転(相続)が発生
- ・贅沢を堪能し、消費が増加
- ・物価高・人手不足・高賃金を誘発
- ・農奴を支配していた領主一族が消滅するという事態が発生
- ・また、人口減少に伴い、労働力不足が生じ、農奴の地位は向上



封建制度・荘園制度の崩壊



封建制度・荘園制度の崩壊は、ペスト(黒死病)が直接的影響を及ぼしたのか？

・ペスト(黒死病)による死者数は、様々な数値が記載されているが、下記図を平均すると3,500万人、死亡率は40%程度であり、多くの人が亡くなったことがわかる

	総人口	死亡者数	死亡率
ゴットフリート	—	—	25～45%
ベネディクトヴ	約8,000万人	約5,000万人	62.50%
J・C・ラッスル	約7,350万人	約2350万人	32%

出展: ペストの歴史 宮崎 揚弘 (P.96より作成)

ペスト（黒死病）後の欧州人の心性変容とユダヤ人虐待

欧州人の心性変容

12・13世紀

温暖な気候

農地拡大

人口増加

都市建設

余剰生産

交易活性化

1347年～
ペスト（黒死病）の時代

凶作・虫害による飢饉
大地震・雪害

ペスト（黒死病）発生

心性の変容

ペスト（黒死病）＝神罰
神は慈愛⇒畏れの対象
memento mori（死を想え）

ペスト（黒死病）の爆発的な感染力と高い致死率

神による罰《温厚な神から峻厳な神へ》

教会では救いを得ることができない

宗教の私物化、現実逃避

ペスト
（黒死病）以後

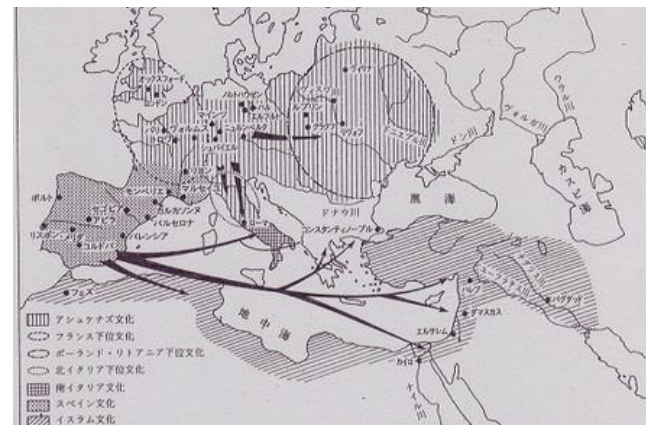
内省

鞭打ち修行僧
宗教私物化

排他

他者迫害
（障碍者・ユダヤ人
異端審問所）

14世紀のユダヤ文化圏



出典：黒川知文
『ユダヤ人迫害史』

ペスト（黒死病）期のユダヤ人迫害

ゲットーでの集住

神の怒りを鎮めるいけにえ

ユダヤ人迫害

教会・王権が迫害を許容

神を殺した罪人

欧州各地での追放、ルーマニア・ウクライナへの移住

迫害が無実化（金貸しだから殺された）

迫害が許容されたまま後世へ

ペスト（黒死病）の芸術への影響



出典：ハンス・ホルバイン「死の舞踏」



出典：ベルン大聖堂（スイス）

ペスト（黒死病）がその後の芸術（絵画・音楽）に
影響を与えた
メメントモリ（死を想え）という思想の広まり



研究報告

3. パンデミックの日本への影響



「パンデミックの日本への影響」 研究分担

1. 日本の神仏信仰と疫病の関連性(山内)
2. 日本の貿易・経済と感染症(柳沢・光永)
3. 感染症と日本人の思想・心理(古川・柳沢)
4. 科学の進歩と日本における感染症(光永)

日本の神仏信仰と感染症



～疫病の蔓延とともに高まる神仏信仰～

◆病気の理由がわからないため、古来のしきたりをひたすら守る以外に方法がなかった日本人

欧州：神に祈れば救われる ↔ 日本：崇りをおさめるために祈るしか術がない

- ・日本の神々は和魂(にぎたま)と荒魂(あらたま)とを併せ持ち、怒らせると荒魂神となり、崇りとなる。
- ・疫病は天の神々や地の神々の支配で生ずるもの。
- ・日本では古より病気を神仏の崇りとして、とりわけ天下に大流行する疫病は、天皇の失策によって天地に異変が起こり、発生すると信じていた。
- ・神々を怒らせないように祈祷が行われる

◆546年 仏教伝来と疫病の流行(日本書紀)

- ・朝廷では、疫病・災害・飢餓に際して、維摩会、仁王会、大般若会、最勝会などを設けて読経を行った。
 - ・737年の痘瘡大流行の際、聖武天皇は、諸国に釈迦仏像と挟持菩薩の造立を命じ、大般若経を写経させた。
- 平安時代まで：痘瘡の際は、大般若経の読経など、幕府が大規模な祈祷を行う
江戸時代から：庶民、各人が神仏に祈る

◆痘瘡神として疫病神をまつる

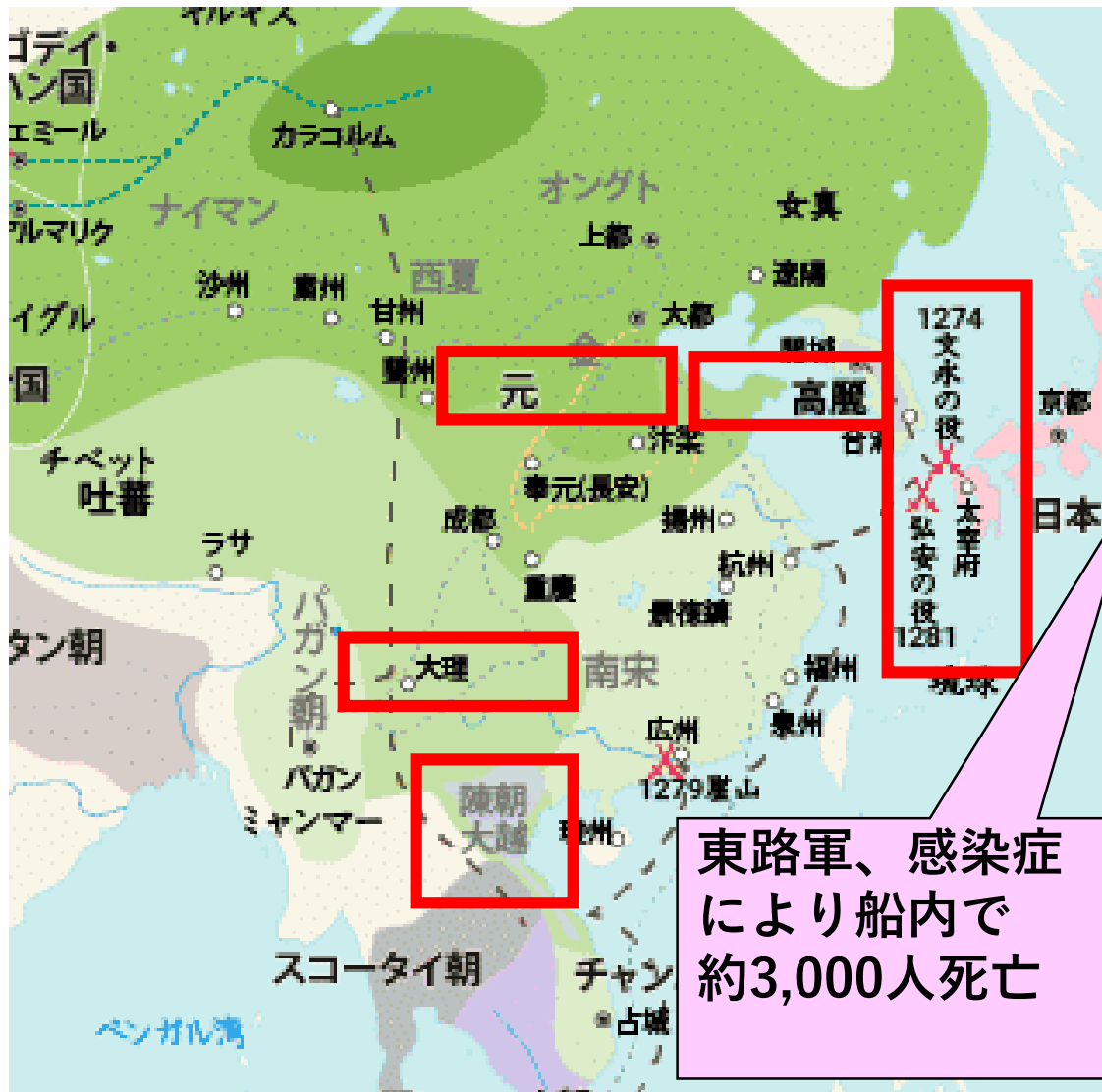
- 痘瘡は新羅からくる病のため、三韓降伏の守り神『住吉大明神』をまつれば病魔に勝つと信じていた。
- 江戸では出雲大社の末社鷲明神を痘瘡神としてまつた。

◆現代にも続く神仏信仰

- 疫病を予言し疫病退散する妖怪『アマビエ』が流行、グッズ化。

※新羅、高麗、百済の三韓

モンゴル帝国の雲南侵攻～ペスト拡大期の東アジア（13・14世紀）



東路軍、感染症
により船内で
約3,000人死亡

1253年：雲南・ビルマ侵攻

1259年：第4代皇帝モンケ
・カーン感染症により死去

1274年：文永の役（元寇）
1281年：弘安の役（元寇）

1258年
1285年：ベトナム侵攻
1288年

1331年：ペスト中国で流行

1347年：ペスト欧州で流行

ペスト
きっかけ

日本

ペスト発生せず

日本

マラリア
疱瘡
赤班
咳病

ペスト
発生

ペスト
拡大

14世紀の貿易とペスト(黒死病)の伝播(日本と欧州の違い)

日本にペストが伝播しなかった理由:

- ①貿易品目: 日本「銅銭・陶磁器・茶・書画」 欧州「絹織物・毛皮」
- ②貿易量: 日元貿易は、管理貿易の中の民間貿易活況



16世紀の貿易と「梅毒」の伝播（14世紀ペストと違い日本に流入）



出典：小学館 日本大百科全書（ニッポニカ）

梅毒の感染ルート

1493年～ スペイン・イタリアから
ヨーロッパに拡大

1498年～ インド⇒インドネシア

1505年～ 広東から中国(明) に拡大

後期倭寇が運んだ梅毒
漢人・ポルトガル人・日本人（3割）

「中国ルート」と「琉球ルート」から
1512年～ 日本に拡大：貿易ルート

17世紀～ 4つの口（琉球・長崎・対馬・蝦夷）
感染症流入（天然痘・マラリア・麻疹）

江戸時代の感染症

麻疹・天然痘など、古くから日本にあるものの他、海外からの感染症が流行

1730年 インフルエンザ大流行 長崎から全日本に広まった

1822年 日本で初めてコレラが観察された。清国を經由し、米艦ミシシッピー号が持ち込んだ。

鎖国状態から、アメリカから急な開国を迫られたこと、感染症が海外からもたらされたことも相まって、攘夷運動が起こる要因ともなった。

貿易・海外視察によって日本にインフルエンザ・コレラなどの感染症が広まった。

しかし、これと共に感染症を対処するための方法がもたらされ、医学の発達が進んだ。

日本における感染症と「科学発展史」

紀元前	7世紀	14世紀	16世紀	17世紀	19世紀	20世紀	現代
パンデミック		ペスト (黒死病)	梅毒	天然痘	ペスト コレラ・結核	スペイン風邪 インフルエンザ	SARS MERS COVID-19
病原体					細菌の発見	ウィルスの発見	
顕微鏡		顕微鏡発明 1550年			光学顕微鏡進歩 17世紀後半～	電子顕微鏡発明・進歩 1932年～	

日本人の貢献

緒方洪庵



天然痘
19世紀

北里柴三郎



ペスト菌発見
19世紀

志賀潔



赤痢菌発見
19世紀

秦佐八郎



梅毒特効薬開発
20世紀

感染症への日本人の貢献～天然痘と緒方洪庵～

1796年 英・エドワード・ジェンナーの牛痘接種法発見から、遅れること半世紀を経て、日本で牛痘接種が広まる。

岡山（足守藩）

1850年
緒方洪庵
「足守除痘館」
（岡山）設立

大阪

1849年
緒方洪庵
「除痘館」設立

江戸

長崎・出島

1849年
日本で初めての痘苗
ジャワ島から上陸
牛痘接種に成功



1849年
蘭方医学禁止令
1858年
蘭方医学海禁
「お玉が池種痘所」設立
牛痘接種、関東で開始
↓
緒方洪庵、江戸へ
「西洋医学所」頭取に

1867年
孝明天皇、天然痘
にて死去

1946年
外地引揚
天然痘3,000人死亡

1955年
日本における
天然痘撲滅

1980年
WHO
天然痘根絶宣言

2002年
ブッシュ大統領
天然痘バイオテロ
種痘接種60万人



研究報告

4. 現代的意義とポストコロナ





ヒアリング報告まとめ

脇村先生・黒川先生

2020
多摩大学・イ
「アジアダイナ

「疫病のグローバル・ヒストリー」試論： 地政学的な視野に立って

脇村孝平（大阪経済法科大学）

一時停止 (k)



2020/8/1

「疫病のグローバル・ヒストリー」試論：
地政学的な視野に立って

脇村孝平（大阪経済法科大学）

モンゴル帝国とペスト



黒死病：ヨーロッパの経験



疫病史における日本の立ち位置

- 日本が、媒介生物の介在する感染症からは免れることができたのは、やはり海が存在が大きいと言わざるをえない。
- ペスト、癘疹チフスは、日本では流行しなかった。
- ただし、人から人へと伝播するウイルスによる感染症は、早い時期に大陸から伝播して、疫病となった事例を挙げることができる。
- 8世紀における天然痘流行の事例：735年(天平7年)から翌々年まで。
 - 人口の三分の一が亡くなったという説がある。
 - [N.Hays, Epidemics and Pandemics: Their Impacts on Human History, Santa Barbara: ABC-CLIO, 2005, p. 31.]

構成

- はじめに
- モンゴル帝国とペスト
- 黒死病：ヨーロッパの経験
- 疫病史における日本の立ち位置
- おわりに

私の専攻は社会経済史ですので、文化史、宗教史、精神史に関わるご質問には、基本的にお答えする知識も資格もありませんので、その点はご容赦願います。

モンゴル帝国とペスト

- マクニール説の評価
 - 言うまでもなく、以上は、すべてウィリアム・マクニール『疫病と世界史』(上・下、中公文庫、2007年、なお、原著は、1976年に出版されている)に依拠している。
 - ただし、現在の時点で考えてみると、このマクニール説において、基本的な論点は、すべて推測により成り立っており、それを実証する歴史的な資料をほとんど欠いていることも確かである。
 - 例えば、歴史家によっては、このウィリアム説をほとんど無視する例もみられる。
 - [N. Hays, Epidemics and Pandemics: Their Impacts on Human History, Santa Barbara: ABC-CLIO, 2005.]
 - ただし、客然性という点では、この説は依然として魅力的である。したがって、本日のこの部分の話は、依然としてマクニール説に依拠している。

黒死病：ヨーロッパの経験

- 「ブレ」の問題
 - 西ヨーロッパ(ドイツ、フランス、イギリスなど)における、12世紀から14世紀にかけての人口増加
 - 「10世紀から11世紀の変わり目頃にはドイツ本土の人口増加が、なお緩慢であったが、12世紀にはその速度を著しく早め、13世紀に頂点に達し、そしておそらく14世紀半ば頃には1347/50年の黒死病をもって終りを告げたという印象であった」
 - W.アーベル(中央経済院「産業恐慌と景気循環—中世中期以来の中欧農業及び人口振替経済の歴史」米原社、1972年、42ページ)
 - 穀物価格の長期的な上昇の趨勢
 - 14世紀初頭の飢饉
 - マルサス説状況？
 - 交易の発展
 - ペストの伝播に影響
 - ただし、ペストの流行は外生的な問題

疫病史における日本の立ち位置

- 天然痘は、この後、13世紀頃まで、度々、**疫癘的(epidemic)**に発生し、人口の停滞の有力な要因になったという。この時期に天然痘が疫病的に発生した理由は、農業の発展と人口の増加によって、感染が拡大する素地が生じていたからだという。しかしながら、13世紀に天然痘は**流行的(epidemic)**となり、その後、日本の人口は増加の趨勢に入った。
 - 寛徳密人口で見える日本史：戦文時代から近末社会まで [JPH 中、2007年、60-61ページ]
 - [N. Hays, Epidemics and Pandemics: Their Impacts on Human History, Santa Barbara: ABC-CLIO, 2005, p. 31.]
- 疫病史における日本の立ち位置
 - 日本は、ユーラシア大陸の「疫病の貯水池(disease pool)」から、古代以来、影響を受けつつも一定の距離を保っていたことが大きい。
 - すなわち、「疫病の貯水池(disease pool)」から隔離していたアメリカ大陸が、15世紀末以降に受けたような被害を免れつつ、他方でそれ以前に、14世紀半ばから15世紀にかけて、ユーラシア大陸の多くの地域で人口減少を招いたペストの影響も免れたからである。

はじめに

- 拙論「疫病のグローバル・ヒストリー：疫病史と交易史の接点」(『地域研究』Vol.7, No.2, 2006年2月)での問題設定
 - 「本稿の目的は、疫病史と交易史の接点を探ろうとすることにある。具体的には、世界史における「帝国」の展開過程や世界のグローバル化の進行といった事象と大規模な疫病の発生との関連を問うことになる」と書いた。
- 本日の問題設定
 - 主に、「疫病のグローバル・ヒストリー」を、**地政学的な視野**から考えることにしたい。その際、思考のモデルとして、梅津忠夫氏「文明の生態史観」を探ることにする。
 - ユーラシア大陸における遊牧民の影響を受ける地域(第二地域)
 - その影響を受けない地域(第一地域)

モンゴル帝国とペスト

- 「ポスト」の問題
 - 結論的に言って、15世紀に、中央ユーラシアの草原地帯では、ペストの流行によって人口減少が起こり、交通の衰退、ひいては帝国そのものの崩壊が齎まったことは、間違いない。その意味で、モンゴル帝国の衰退の一つの重要な要因であったと考えるのではないか。
 - 同じ(同時期に、イスラム世界(中東地域)においても、ペストにより、商業ネットワークのハブになる都市の人口減少と衰退が起った可能性が高い。例えば、シジファ、シリア。
 - 中国では、13世紀初頭から14世紀末にかけて人口が半減した(1200年の1億2300万人→1393年の6500万人)というが、マクニールは、この人口減少をペストの流行によるものと推測している(マクニール、下、28ページ)。
 - これらの論点は、ジャネット・L・アールゴッドによっても、ほぼ踏襲されている。
 - ジャネット・L・アールゴッド(後藤次高他訳)『ヨーロッパ恐慌以前』上・下、岩波書店、2001年。
 - 中央ユーラシアでは、ペストによる人口減少というダメージが大きかった。

黒死病：ヨーロッパの経験

- 「ポスト」の問題
 - 西ヨーロッパに関しては、15世紀を農業不況の時代と捉える説(W・アーベル)が存在する。
 - 穀物価格の低落
 - 「[14～15]世紀の変わり目を過ぎても、より顕著の変動に中断されながら、穀物価格の下落が続いた。25年平均当たりより短期の現象については素直にみずからしか知りえないが、それによれば中欧の穀物価格は15世紀後半に最低の水準に達したのである」(アーベル、74ページ)。
 - 農業の衰退、地代の低下、農地の荒廃。
 - その原因として、15世紀における人口減少が指摘される。
 - 継続的なペストの流行も一因か？
 - いわゆる「封建制」の衰退？

疫病史における日本の立ち位置

- 19世紀のコレラに話を移すと、1822年の流行を除くと、その後10回にもわたる日本におけるコレラの流行は、やはり開港以後のことであり、多くの場合、その侵入経路は、開港場であった。ちなみに、多くの場合、その直接のルートは、中国の沿海地域からのものであった可能性が高い。
- しかしながら、日本は、明治以降、ヨーロッパ由来の近代的な医療・公衆衛生の手段を武器にしつつ、ユーラシア大陸からの感染症の影響をコントロールできた。

モンゴル帝国とペスト

- 「ブレ」の問題
 - 上記拙論で書いたこと「モンゴル帝国の成立がユーラシア大陸の中央部を貫く交易ルートにある種の安全保障を提供することによって、東西交易が活発化し、ひいては中央アジアからヨーロッパへとペストを伝播したと考えられている」
 - 以上に加えて、14世紀のペストのパンデミックは、その起源が、中央アジアの草原地帯(モンゴル軍が、ヒマラヤ山麓から中央アジアの草原地帯に持ち込んだ)にあること、また、ほぼ同時期に中国でペストの大流行があったことなどを書いた。
 - しかしながら、最近の研究によると、東西交易の活発化は、モンゴル帝国が成立する以前からかなり活発化していたことが指摘されている。
 - 「東アジア・東南アジアの出土陶磁のデータを見る限り、『モンゴルの世紀』に先立つ「長い一世紀」における遠距離交易の発展傾向を想定できる」
 - 尚正明「モンゴル帝国とユーラシア広域ネットワーク」秋田茂編『グローバル化の世界史』日本放送出版、2019年。

黒死病：ヨーロッパの経験

- 黒死病に関する研究
 - 14世紀のペストのパンデミックに関して、ヨーロッパ地域を対象とする研究が圧倒的に充実している。最初の流行に関する語彙(伝播)の経路や人口減少の実態に關しても、かなり詳しいことが明らかになっている。
 - 伝播経路に関しては、次のスライドの地図を参照。交易ルートとの関連。この点は、前掲拙論でも簡単に触れた。
 - 人口への影響
 - 「経済学者のハバロ・ロマニヤによる最新の推定によれば、ヨーロッパの人口は1300年の9400万人から、1400年には8800万人に落ち込んだ。減少率は25%を超える」(ウォルター・シャイデル「スタンフォード大学教授」『黒死病』流行後に欧州の労働者が経験したこと—食料、資金、宗教、慈善活動はどう変わったか(東洋経済Online <https://toyokeizai.com/articles/345363>)

黒死病：ヨーロッパの経験

- 「ポスト」の問題(続き)
 - しかしながら、アーベルは、労働者の実質賃金は上昇した点も指摘している。
 - 「おそらく(実質的な)賃金上昇は、すでに世紀半ばの黒死病以前に始まったのであろうが、その後も激しく上昇しつづけたのである。労働者不足と賃金上昇に対抗するため、多くの領主や国々では農産物の生産を促進する賃金安例が発表され、その公定価格には労働者も雇主も拘束されるべきであった」(アーベル、77ページ)。
 - さらに、もともと楽観的な見方もある。すなわち、
 - 「黒死病によって人口は激減したものの、物理的なインフラは壊れずに残った。生産性が向上したおかげで、人口の減少ほど生産量は減らなかったため、1人当たりの平均的な生産量と所得は上昇した」。
 - 「ペストの犠牲者からの遺物や、適度相対した生存者からの寄贈に支えられ、宗教的、教育的、慈善的寄付が急増した。おかげで、人手不足にもかかわらず建設工事が推進され、個人は非熱帯都市労働者ととらわが「聖の奉命者」を兼ねた」。
 - ウォルター・シャイデル(スタンフォード大学教授)「黒死病」流行後に欧州の労働者が経験したこと—食料、資金、宗教、慈善活動はどう変わったか(東洋経済Online <https://toyokeizai.com/articles/345363>)

おわりに

- 14世紀および15世紀に、中央ユーラシアでは、ペストがもたらした人的被害は、社会・経済に致命的な打撃を与えた。これが、その後の世界史の帰趨に大きな影響を与えた。
- 西ヨーロッパの場合、ペストから甚大な影響を受けつつも、その後、特に16世紀以降、基本的には回復過程に入った。ただし、今日の私の話では、その点を全く述べることでできなかった。他日を期したい。
- 他方で、日本は、ユーラシア大陸の「疫病の貯水池(disease pool)」から「適度な距離」を保ちうる位置にあったと言えるのではないが。

はじめに

- ▶ 拙論「疫病のグローバル・ヒストリー：疫病史と交易史の接点」(『地域研究』Vol.7, No.2, 2006年2月)での問題設定
 - ▶ 「本稿の目的は、疫病史と交易史の接点を探ろうとするところにある。具体的には、世界史における「帝国」の展開過程や世界のグローバル化の進行といった事態と大規模な疫病の発生との関連を問うことになる」と書いた。
- ▶ 本日の問題設定
 - ▶ 主に、「**疫病のグローバル・ヒストリー**」を、**地政学的な視野**から考えることにしたい。その際、思考のモデルとして、梅棹忠夫氏「文明の生態史観」を採ることにする。
 - ▶ **ユーラシア大陸における遊牧民の影響を受ける地域**(第二地域)
 - ▶ **その影響を受けない地域**(第一地域)

おわりに

- ▶ 14世紀および15世紀に、中央ユーラシアでは、ペストがもたらした人的被害は、社会・経済に致命的な打撃を与えた。これが、**その後の世界史の帰趨に大きな影響を与えた。**
- ▶ **西ヨーロッパの場合**、ペストから甚大な影響を受けつつも、その後、特に**16世紀以降、基本的には回復過程**に入った。ただし、今日の私の話では、その点を全く述べることができなかった。他日を期したい。
- ▶ 他方で、**日本は、ユーラシア大陸の「疾病の貯水池 (disease pool)」から「適度な距離」を保ちうる位置**にあったと言えるのではないか。

ヒアリングの様子

PowerPoint presentation titled "欧州のパンデミック - 黒死病と宗教意識の変化 -" (The European Pandemic - The Black Death and the Change in Religious Consciousness -) by 黒川知文 (Tomohiko Kurokawa).

The slide displays the title and author name, along with a historical illustration of the Black Death (plague) scene, showing a person on a cart being pulled by a horse, surrounded by people and a city in the background.

The presentation interface shows the ribbon menu with tabs: ファイル (File), タッチ (Touch), ホーム (Home), 挿入 (Insert), デザイン (Design), 画面切り替え (Slide Sorter), アニメーション (Animations), スライドショー (Slide Show), 校閲 (Review), and 表示 (View). The ribbon includes various tools for editing, formatting, and presentation control.

The slide number is 1/37, and the language is set to 日本語 (Japanese).



ヒアリング資料 黒川先生①

欧州のパンデミック ー黒死病と宗教意識の変化ー



Table with 2 columns: Year, and a column containing text descriptions of events related to the Black Death and religious changes.

参考文献

- ・阿部匡也『戦る中世ヨーロッパ』日本エディタースクール出版部 1987年
- ・池上俊一『ヨーロッパ中世の宗教運動』名古屋大学出版会 2007年
- ・ノーマン・C・カンター『黒死病 疫病の社会史』青土社 2020年
- ・木村靖二等監修『詳説世界史図録』山川出版社 2020年
- ・黒川知文『ユダヤ人の歴史と思想』ヨベル 2019年
- ・ダニエル・デフォー『ペストの記憶』研究社 2017年
- ・フレデリック・ドルーシュ『ヨーロッパの歴史』欧州共通教科書 東京書籍 2002年
- ・宮崎博弘『ペストの歴史』山川出版社 2015年
- ・村上隆一郎『ペスト大流行』岩波新書 1983年
- ・Encyclopaedia Judaica vol.16 Jerusalem 1971
- ・「中世の黒死病ペスト」CS History Channel 2005年

ペストの起源

「ペリシ人酋長へのわがわがいは、5つの金の禮物、すなわち5つの金のねずみ」
第一サムエル記18章4節 BCL11世紀

ペストの世界的流行

- 中世初期 541-767年
ウガンダ・ケニア・アラビア半島→地中海→ヨーロッパ・イギリス
「ユスティニアヌス帝の大疫」
東西ローマ帝国の後継 修道院運動(ベネディクト修道院)
- 中世末期-近代 1340-1840年代
モンゴル→中央アジア→カフカ→シベリア→全ヨーロッパ→ロシア
- 近代-現代 1860年代-1950年代
中国雲南省→インド・ホンペイ(1200万人死亡)→アフリカ・オーストラリア・アメリカ 肺炎ペストとなり東南アジア

ペスト菌について

- 感染メカニズム ネズミ⇒ノミ⇒人 人⇒人(飛沫感染)
- 1 腺ペスト:一時的なペスト 潜伏期間2-6日 致死率80%
腺ペスト→リンパ・腺腫・下咽頭に認められ全身に発疹・腺腫・出血点→→→ 腺腫に基
- 2 肺ペスト:腺ペスト発症中に菌血症から肺炎を併発 致死率100%
菌血症・呼吸困難→咳と痰・チアノーゼ→死
- 3 腹ペスト:腺ペストの腸化 腸管内に発症
嘔吐・下痢・血便→脱水・敗血症から→敗血症に死 死亡率100%
- ペスト菌は、半月以上生存できる 河川の中には半月以上生存できる 乾燥状態に強い
- 2001年フランスのモンペリエで霊柩館の鼠から肺腺ペスト菌のDNA発見



黒死病年表

Table with 2 columns: Year, and a column containing text descriptions of events related to the Black Death and religious changes.

ペストの予防と治療法 予防方法として効果的なものは少ない

国境や都市への参り禁止(1351年、イ、フ、ラ)の罰や参りを拒否
殺害した市民・市民の死後 女性の死後 港口の閉鎖 町の閉鎖 道しるばしと狭い道 疫病
患者の隔離を拒否 疫病の心算を食べる
疫病の検査 下痢で苦しむに似てする
疫病の検査 疫病(ペスト)の検査
ギド・シャリアタ(イ) 疫病 ローマ教皇の疫病 ペストから疫病の検査
内服薬とスプーリで疫病で苦しむ 疫病の検査 疫病 少量の疫病検査
疫病の検査 疫病は疫病 疫病は疫病 疫病は疫病 疫病は疫病 疫病は疫病
疫病の検査 疫病は疫病 疫病は疫病 疫病は疫病 疫病は疫病 疫病は疫病

現代 : 疫病検査のストレプトマイシンの疫学研究 疫病検査
2011年疫病検査

表1 プロヴァンス地方における世帯の減少率

地名	1340年	1349年	1350年	1351年	1352年	1354年	1355年	1356年	%
エクス	1467							810	44.8
ダラース	1360		738						45.8
アプト	925						444		52.0
リエ	680				213				68.7
ヴァランソル	669					226			65.8
ムステイエ	622					204			67.2
フォルカルギエ	600		281						53.2
アイニユ	444						290		41.5
リアン	300	213							29.0

Benedictow, O. J. The Black Death 1346-1353, The Complete History. Woodbridge, 2004. p. 311.



ペストによる社会構造上の変化

- 農民人口の減少→地位向上・待遇改善→独立自営農民→農民一揆
1357年ジャックリーーの乱
1381年ワットタイラーの乱
- 農民人口の減少→労働力不足→農作業の機械化(水車等)・活版印刷術
- 貴族の疲弊→封建反動・騎士の略奪→農民一揆で損害→諸侯・騎士の没落
- 陸路による商取引の衰退→海路による商取引の発展
1374-1435年ハンザ同盟の進展

「物乞い」
ジャン・フロワサール『フランス年代記』
パリ国立図書館
ペストで生き延びた者は、教会の前で
物乞いをして生きつないだ



「モーにおけるジャックリーーの乱
(1357年)
ジャン・フロワサール『フランス年代記』
パリ国立図書館

軍制に苦しむ農民は貴族に対して
反乱を起こした
農民は城の住人をすべて虐殺した



ハンザ同盟加盟都市(1374-1435年)



中世末期の通商路

陸路よりも海路による
商取引が優勢
になった



「ハンザの商港」
細密画(15世紀) ハンブルク国立図書館
豪華な衣装を着た貿易商人たちの商隊
同様の光景は14、15世紀のヨーロッパの
あらゆる港で見られた



ヒアリング資料 黒川先生②



ユダヤ人と黒死病
 医学が発達していなかった14世紀当時、ペストの原因として「大気汚染説」、「死神説」、「魔女説」、「昆虫やネズミ説」などともに唱えられたのが「ユダヤ人説」であった。「ユダヤ人が井戸に毒を流したから死んだ」などと言われた。背景にあったのは、ユダヤ人にペストの犠牲者が少なかったこと、それは、中世後期のユダヤ人は裕福だったからペストから避難でき、またユダヤ教の戒律が健康を保つ一因となったからであった。

ユダヤ教戒律

- 血を肉といっしょに食べてはならない
- 反動しない動物(豚)は食べてはならない
- 一日の終わりに身を清める「両手のあらい」
- 安息日や礼拝の前に身を清める「全身のあらい」

註書『ユダヤ人の歴史と思想』131～137頁



- 黒死病の原因説**
- 1 大気汚染説 多数説
 - 2 悪い食べ物
 - 3 血液が発酵期にありペストと結びつく
 - 4 不規則な季節の変化
 - 5 気象異変 フェーン現象
 - 6 占星術的病因論 木星と火星の「合」により体のバランスが壊れた
 - 7 患者の眼から発した瘴気
 - 8 キリスト教徒の敵(ユダヤ人)が空気、水、飲食物に毒を投入
 - 9 死神説 魔女説
 - 10 ネズミ説
 - 11 人間の罪に対する神の罰 伝統説

鞭打ち苦行団 (Flagellant)
 「大地震があり、方々に疫病やききんが起り、恐ろしいことや天からのすざましい前兆が現われます」終末預言

ルカ福音書21章11節

13世紀イタリアにおいて、世界終末の接近を警告し、道徳的退廃を非難して鞭打ち苦行を行ったものが、最初の集団的な事例である。先導するのは十字架と松明を掲げた一人のドミニコ会士の修道士。上半身は裸体になり、顔はヴェールで隠し、足首まで届く長いスカートのこきものを身にまとい、血を流すまで露出された肌を自分で鞭で打った。告白の祈りを声高に唱え、教会を見つめるや必ず祭壇の前にひれ伏した。この運動は、次第に半封建体制、反教会運動という政治的な方向へ組織化される傾向を帯びようになり、教会は警戒を強め、教皇は1261年、行進の禁止を呼びかけ、この熱狂的な運動は終息。それが、黒死病の勃発とともにふたたび激しい活力を取り戻した。



黒死病とユダヤ人追放令
 フランシスコ派とドミニコ派説教師による民衆への反ユダヤ宣伝活動黒死病の原因はユダヤ人だとして虐殺「ユダヤ人が井戸に毒を流した」

「虚偽と悪魔にだまされた特定のキリスト教徒がこの悪疫の原因をユダヤ人が毒を流したことにしている」1349年9月21日

1420年代各都市でユダヤ人追放令
 オーストリア大公アルブレヒト2世と
 ポーランド王カジミエシ3世がユダヤ人保護に難し入国を歓迎

ユダヤ人の東欧への移住

香料を入れて、ペスト患者の嫌悪しを避ける仮面をした医者



ペスト期における鞭打ち苦行の内容

- 鞭打ちの対象: 盗み 姦通 男色の罪
- 展開地: ドイツ南部→全ドイツ→フランドル・オランダ・フランス→東欧
- 背景: アヴィニオン教皇コハヌス22世とドイツ皇帝ルードヴィヒとの確執
 教皇による南ドイツの聖務停止と破門聖職者の聖職売買と結婚の横行
 「1348年には、教会は真に軽蔑すべきありさまになり果てていた」池上民閑信仰: ペストは罪深い人間に対する怒れる神の罰である
- 鞭打ちの様式: 短期滞在と上演の許可・二人並び歌い鞭打ち・十字架型になり地面に臥す・観衆からお金を集める・「天上書状」朗読・説教(悔い改め)・歌い聖堂に入る・十字架型に三度倒れる・3日半の旅行・50-450人の男性集団・貴族や庶民(農民と市民)も貧者も参加
- 教皇クレメンスの断罪の教勅(1349年10月20日) 仏王も禁止→終息
- 「天上書状」: キリストの手紙 悔い改めて神に従え 教会批判はない

黒死病に対する一般的な応答

- 1 節約を導び、過度にわたらないことが最上策と考えて実行
- 2 欲望の赴くままに解放して陽気に暮らす
- 3 中道を行く 香りのよい花をたずさえて、嘆ぐ
- 4 逃げるにまさった上策はない 富裕階級

村上



民衆はユダヤ人を迫害したが、ローマ教皇や聖職者はユダヤ人を保護した



ドイツの都市から追放されるユダヤ人
 1428年頃

『ジュエッッシュ・ワールド』51頁



ヒアリング資料 黒川先生③

「死の舞踏」
バーゼル
ドミニコ教会

ローマ教皇でも死を
免れることは出来な
いことを描いている
15世紀に津波に多く
の地域で描かれた

阿部



天国と地獄図

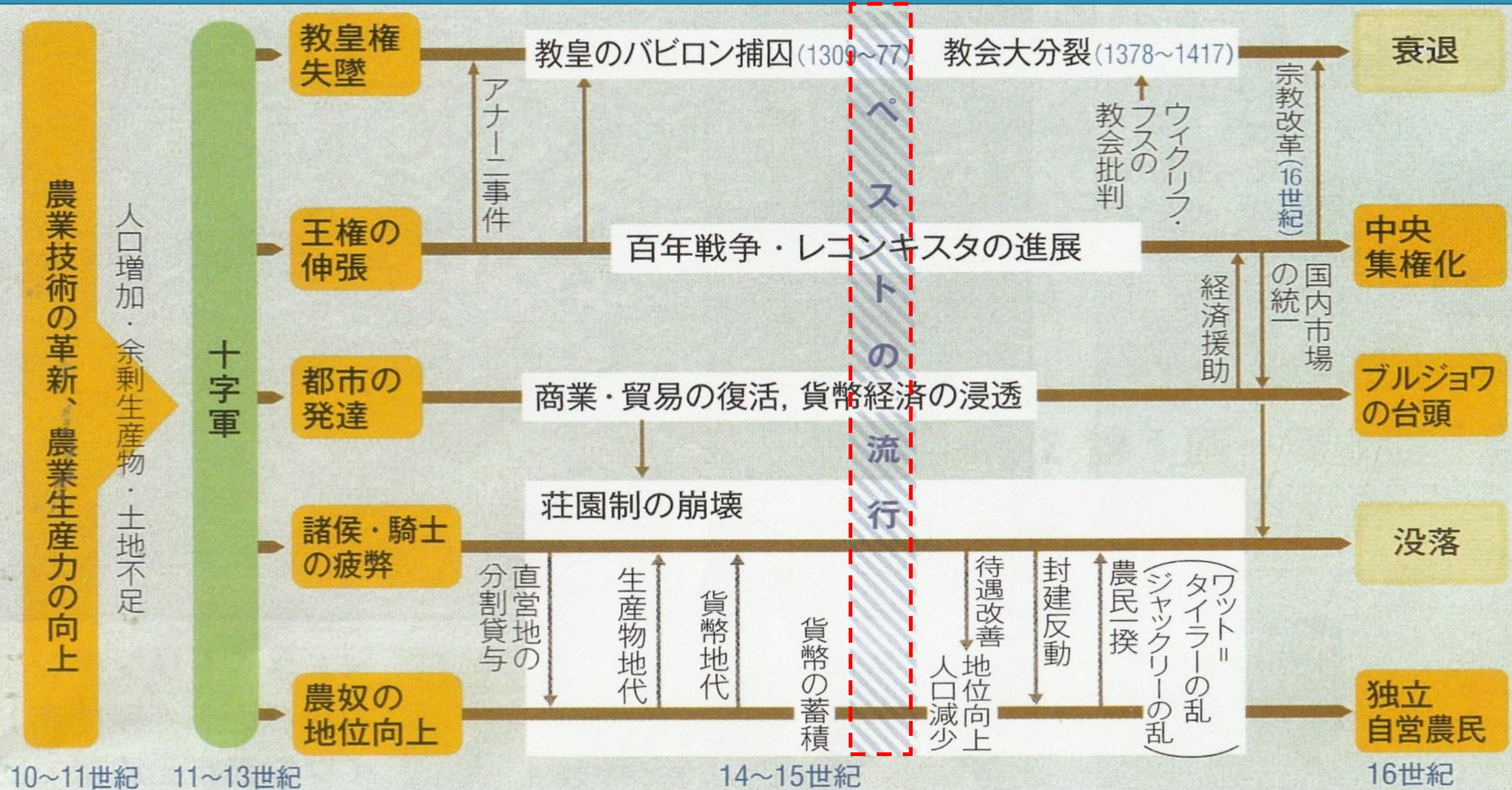
キリスト教の死生観が民衆の間
に定着する



ペストによる欧州人の心性の変容

- 反ユダヤ主義の先鋭化→ユダヤ人迫害・追放→ユダヤ人の東欧移住
- キリスト教の死生観の定着—「死の舞踏」「メメント・モリ」終末信仰
- 教皇権の衰退→信徒による宗教運動の進展……………宗教改革
- 神への信仰の弱小化→人間への注目……………ルネサンス
個人主義

欧州史・宗教史専門：黒川先生へのヒアリング



欧州史・宗教史専門：黒川先生へのヒアリング

ペストによる社会構造上の変化：ヨーロッパの 「疫病統一体」から「革命統一体」へ

農民人口の減少→地位向上・待遇改善→**独立自営農民**→農民一揆

資産移転

都市集中 1357年ジャックリーの乱

1381年ワットタイラーの乱

農民人口の減少→労働力不足→農作業の機械化(水車等)・活版印刷術



貴族の疲弊→封建反動・騎士の略奪→農民一揆で損害→諸侯・騎士の没落
聖職者の半減→若年聖職者の弊害・ロラード派(ウィクリフ)の浸透

陸路による商取引の衰退→海路による商取引の発展

1374-1435年ハンザ同盟の進展

各都市に公衆衛生局設置 検疫(イタリア40日間) 死亡告知表発行

欧州史・宗教史専門：黒川先生へのヒアリング

ペストによる欧州人の心性の変容

- 反ユダヤ主義の先鋭化→ユダヤ人迫害・追放→ユダヤ人の東欧移住
- キリスト教の死生観・終末観の定着—絵画「死の舞踏」「メメント・モリ」
- 信仰の昂揚
 - ・ 聖年1350年 ローマに巡礼すれば天国 100-120万人
 - ・ マリア崇拜(1348年8月16日涙するマリア像)
 - ・ 聖人崇拜(聖セバスティアヌス等53人の守護聖人)
 - ・ 教会への寄進増加(70慈善施設建設・都市に大聖堂建設)
 - ・ 個人宅の礼拝堂・供養堂(貴族や裕福な市民)
- 教皇権の衰退→信徒による宗教運動の進展……………宗教改革
 - ウィクリフ(1324-1384年)・ロラード派・フス
- 神信仰への疑惑→人間への注目……………×……………ルネサンス
 - 裕福な貴族文化・古典に戻る運動

年間スケジュール

春

回	月	日	議 題	文献調査	フィールドワーク	備 考
1	5	16	初回学長講話 自己紹介 今年度テーマ方向性			
2		23	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		年間スケジュール確定 Google driveシェア Facebookグループ作成
3		30	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		アジア班メンバー確定
4	6	6	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		
5		13	分担発表 研究計画発表PPT確認	文献集計・目次		
6		20	分担発表 研究計画発表PPT確認	文献集計・目次		
7		27	分担発表 研究計画発表PPT確認	文献集計・目次	FW検討(仮)	
8	7	4	◆研究計画中間発表	研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク		
9		11	◆研究計画中間発表	研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク		
10		18	研究計画発表反省 中間発表に向けた計画			
11		25	分担発表	中間発表に向けた討議		
12	8	1	フィールドワーク	大阪経済大学 脇村先生		
		8	休講			
		15	フィールドワーク	中央学院大学 黒川先生		
		27/28	◆夏季合宿(予定) 箱根水明荘	発表者(役割分担): 1.研究概要、2.目次、3.内容、4.参考文献・研究計画・FW		

秋

		5	休講			
		12	休講			
	9	19	休講			
13		26	下期進行確認 分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		年間スケジュール再確認 下期加入者確定
14		3	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
15		10	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
16		17	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
17	10	24	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
18		31	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	各自完成版を持ち寄る		
19		7	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	全体を印刷して確認		
		14	休講			多摩大学学祭予定
20	11	21	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	全体を印刷して確認		
21		28	PPTレビュー AL祭・最終発表に向けて			
22		5	PPTレビュー AL祭・最終発表に向けて			
23	12	12	◆アクティブラーニング 祭？	アクティブラーニング(AL)祭（多摩キャンパス？）		
24		19	◆論文発表・提出？			
		26	休講			
25		2	休講			
		9	2019年度最終講義			
		16	休講			センター試験
26	1	23	◆論文提出/懇親会 (年度最終日)	最終論文(完成版)提出日		
		30	懇親会			

9月
フィールドワーク予定

参考文献・論文 全78件

➤ 図書52冊

1. 寺島実郎『日本再生の基軸』（岩波書店,2020）
2. 飯島渉『ペストと近代中国』（研文出版,2000）
3. 飯島渉『感染症の中国史——公衆衛生と東アジア』（中公新書、中央公論新社,2009）
4. 飯島渉『感染症と私たちの歴史・これから』（歴史総合パートナーズ第4巻、清水書院,2018）
5. 石坂尚武『どうしてルターの宗教改革は起こったか——ペストと社会史から見る』（ナカニシヤ出版,2017）
6. 石坂尚武『イタリアの黒死病関係史料集』（刀水書房,2017）
7. 石坂尚武『苦難と心性——イタリア・ルネサンス期の黒死病』（刀水書房,2018）
8. 氏家幹人『江戸の病』（講談社選書メチエ437、講談社,2009）
9. 荻上チキ『検証 東日本大震災の流言・デマ』（光文社新書518、光文社,2011）
10. 梶田昭『医学の歴史』（講談社学術文庫,2003）
11. 川島高峰『銃後——流言・投書の太平洋戦争』（読売新聞社,1997）
12. 海音寺潮五郎『蒙古の襲来』（河出書房新社,2008）
13. 蔵持不三也『ペストの文化誌—ヨーロッパの民衆文化と疫病』（朝日新聞社,1995）
14. 黒田俊雄『日本の歴史 8—蒙古襲来』（中央公論新社,1974）
15. 小松左京『復活の日』（早川書房,1964）
16. 酒井シヅ『日本の医療史』（東京書籍,1982）
17. 酒井シヅ『病が語る日本史』（講談社,2002）
18. 佐藤健二『流言蜚語——うわさ話を読みとく作法』（有信堂高文社,1995）
19. 島崎晋『人類は「パンデミック」をどう生き延びたか』（青春出版社,2020）
20. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡（下）』（講談社現代新書,1996）

21. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(上)』(講談社現代新書,1996)
22. 立川昭二『病気の社会史——文明に探る病因』(岩波現代文庫、岩波書店,2007)
23. 田村実造『中国文明の歴史 7—大モンゴル帝国』(中央公論新社,2000)
24. 東北学院大学 震災の記録プロジェクト・金菱清(ゼミナール) 編
『呼び覚まされる霊性の震災学——3・11 生と死のはざままで』(新曜社,2016)
25. 新村拓『日本医療社会史の研究——古代中世の民衆生活と医療』(法政大学出版局,1985)
26. 新村拓『死と病と看護の社会史』(法政大学出版局,1989)
27. 新村拓編『日本医療史』(吉川弘文館,2006)
28. 新村拓『日本仏教の医療史』(法政大学出版局,2013)
29. 富士川游『日本疾病史』(吐鳳堂,1912)
30. 見市雅俊『コレラの世界史』(晶文社,1994)
31. 宮崎揚弘『ペストの歴史』(山川出版社,2015)
32. 村上陽一郎『ペスト大流行——ヨーロッパ中世の崩壊』(岩波新書黄版225、岩波書店,1983)
33. 百島祐貴『医学生のための医学史』(ボイジャー・プレス/医学教育出版社,2017)
34. Albert CAMUS (アルベール・カミュ)『La peste (ペスト)』(創元社,1950)
35. Connie WILLIS (コニー・ウィリス)『Doomsday book (ドゥームズデイ・ブック)』(早川書房,1995)
36. Daniel DEFOR (ダニエル・デフォー)『A journal of the plague year (ペストの記憶)』(研究社,2017)
37. Gabriel GARCÍA MÁRQUEZ (ガブリエル・ガルシア=マルケス)
『El amor en los tiempos del cólera (コレラの時代の愛)』(新潮社,2006)
38. Guy Richard (ギ・リシャール)『Ailleurs, L'herbe est plus verte
(移民の一万年史—人口移動・遥かなる民族の旅)』(新評論,1996)
39. Jack Weatherford (ジャック・ウェザーフォード)
『チンギス・ハンとモンゴル帝国の歩み—ユーラシア大陸の革新』(パンローリング,2019)

- 40. Janet L.Abu-Lughod (ジャネット・L・アブー＝ルゴド) 『ヨーロッパ覇権以前 (上) 』(岩波書店,2001)
- 41. Janet L.Abu-Lughod (ジャネット・L・アブー＝ルゴド) 『ヨーロッパ覇権以前 (下) 』(岩波書店,2001)
- 42. Jared DIAMOND (ジャレド・ダイヤモンド) 『Guns, germs, and steel: the fates of human societies (銃・病原菌・鉄——一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎) 』(草思社,2000)
- 43. Jean-Marie Gustave LE CLÉZIO (ル・クレジオ) 『La quarantaine (隔離の島) 』(筑摩書房,2013)
- 44. John KELLY (ジョン・ケリー) 『The great mortality : an intimate history of the Black Death, the most devastating plague of all time (黒死病——ペストの中世史) 』(中央公論新社,2008)
- 45. José SARAMAGO (ジョゼ・サラマーゴ) 『Ensaio sobre a cegueira (白の闇) 』(日本放送出版協会,2001)
- 46. Norman F. CANTOR (ノーマン・カンター) 『In the wake of the plague : the Black Death and the world it made (黒死病——疫病の社会史) 』(青土社,2002)
- 47. Sandra HEMPEL (サンドラ・ヘンペル) 『ビジュアル パンデミック・マップ——伝染病の起源・拡大・根絶の歴史』(日経ナショナル ジオグラフィック社,2020)
- 48. Walter SCHEIDEL (ウォルター・シャイデル) 『The great leveler: violence and the history of inequality from the stone age to the twenty-first century (暴力と不平等の人類史——戦争・革命・崩壊・疫病) 』(東洋経済新報社,2019)
- 49. William H. McNeil (ウィリアム・H・マクニール) 『Plagues and Peoples (疫病と世界史) 』(新潮社,1985)
- 50. William J. Bernstein (ウィリアム・バーンスタイン) 『A Splendid Exchange (交易の世界史 (上)) 』(ちくま学芸文庫,2007)
- 51. Willy Hansen・Jean Freney (ウィリー・ハンセン、ジャン・フレネ) 『細菌と人類』(中公文庫,2008)
- 52. Yuval Noah HARARI (ユヴァル・ノア・ハラリ) 『Sapiens: a brief history of humankind (サピエンス全史——文明の構造と人類の幸福) 』(河出書房新社,2016)

➤ 論文24件

1. 寺島実郎『宗教改革が突き動かしたもの』（『世界』第833号（2012年8月号）、岩波書店,2012）
2. 寺島実郎『プロイセン主導の統合ドイツに幻惑された明治日本——モンゴルという衝撃——
十字軍と蒙古襲来』（『世界』第903号（2018年1月号）、岩波書店,2017）
3. 寺島実郎『中国の強大化・強権化を正視する日本の覚悟』
（『世界』第906号（2018年4月号）、岩波書店,2018）
4. 寺島実郎『大中華圏とモンゴル、その世界史へのインパクト』（『世界』第907号（2018年5月号）、
岩波書店,2018）
5. 寺島実郎『ビッグ・ヒストリーにおける人類史』（『世界』第909号（2018年7月号）、岩波書店,2018）
6. 寺島実郎『一九六八年再考——トランプも「一九六八野郎」だった』
（『世界』第910号（2018年8月号）、岩波書店,2018）
7. 寺島実郎『グローバル・ヒストリーへの入口を探って』
（『世界』第911号（2018年9月号）、岩波書店,2018）
8. 寺島実郎『人類史における宗教の淵源』（『世界』第914号（2018年12月号）、岩波書店,2018）
9. 寺島実郎『世界宗教の誕生とその同時性』（『世界』第915号（2019年1月号）、岩波書店,2018）
10. 寺島実郎『現代日本人の心の所在地——希薄な宗教性がもたらすもの』（『世界』第918号
（2020年4月号）、岩波書店,2020）
11. 寺島実郎『新型コロナウイルス危機の本質——理性ある対応とは何か』
（『世界』第919号（2020年5月号）、岩波書店,2020）
12. 池田圭佑・榊剛史・鳥海不二夫・栗原聡『口コミに着目した情報拡散モデルの提案および
デマ情報拡散抑制手法の検証』（『情報処理学会論文誌数理モデル化と応用』第11号,2018）
13. 池田圭佑・榊剛史・鳥海不二夫・栗原聡『災害時におけるデマ拡散のモデル化から得られた
知見の報告』（「2017年度人工知能学会全国大会」第31回大会,2017）

14. 諫早庸一『十三—十四世紀アフロ・ユーラシアにおけるペストの道』（青土社,2020）
15. 石坂尚武『《峻厳な神》とペスト的心性の支配：一五世紀フィレンツェの立法・政策・判決に心性を読む』（同志社大学人文学会,2013）
16. 石坂尚武『一四世紀イタリアの時代状況とペスト』（同志社大学人文学会,2012）
17. 石坂尚武『黒死病でどれだけの人が死んだか－現代の歴史人口学の研究から』（同志社大学人文学会,2012）
18. 大谷明『文明と伝染病：その関連の歴史』（『日本細菌学雑誌』 58（4） 2003,2003）
19. 佐々木博光『ペストの創作－ニュルンベルクのユダヤ人迫害、一三四九年一二月五日』（大阪府立大学人文学会 人文学論集 28巻,2010）
20. 佐々木博光『近代ドイツの歴史教科書にみる中世のユダヤ人迫害』（大阪府立大学人文学会 人文学論集 30巻,2012）
21. 佐々木博光『黒死病とユダヤ人迫害－事件の前後関係をめぐって』（大阪府立大学紀要（人文・社会科学） 52巻,2004）
22. 立川昭二『交通と疫病』（IATSS review vol3,1977）
23. 中村昭『中世の流行病「三日病」についての検討』（『日本医史学雑誌』 第33巻第3号（1987年7月30日）,1987）
24. 脇村孝平『疫病のグローバルヒストリー－疫病史と交易史の接点－』（『地域研究』 Vol.7 No.2（2006年2月）,2006）



以降資料

研究方法

 文献研究とフィールドワークを中心に研究活動を行う。

 2017年～2019年はユーラシア大陸をつなげたモンゴル帝国やその周辺国に焦点をあてた。

 2020年は新型コロナウイルスによる世界的な感染拡大を踏まえ、パンデミックの歴史研究を行う。
グローバル化がもたらせたパンデミックによる現象とその影響、現代におけるポストコロナの世界を考える。

 歴史的観点、経営組織論、国際経営論からも分析

 フィールドワークは社会情勢や訪問先の都合も踏まえ計画

テーマ構成

1章

モンゴル帝国とパンデミック (半田・生田)

2章

欧州のパンデミック (北山・三田・小出・桑原・池田)

3章

パンデミックの日本への影響 (光永・山内・柳沢・古川)

4章

現代的意義とポストコロナ (塚原・和泉)

2017年～2019年 論文の結論 ～モンゴル帝国史研究史4年目

2017

「モンゴル帝国のユーラシア興隆史」 107ページ

「モンゴル帝国が現代にもたらすもの」

1. 「経済連携」による「平和と安定」
2. リーダー（チンギス・カーン）の「思想」と多様性の受容

2018

「モンゴル帝国の興隆と衰退」 244ページ

「得られた示唆」

1. 歴史は繰り返す：ゆるやかな統治の限界点
2. 拡大から縮小過程の生き方：成長だけではない生き方
3. リーダーの資質：資質とガバナンスの低下

2019

「モンゴル帝国と朝鮮半島」 84ページ

「得られた示唆」

1. 大帝国の属国でありながらも自らの価値を最大化する立ち回り
2. 柔軟な思考と強固なアイデンティティによる国家（組織）維持

年表(918年～1392年のうち1238年～)

高麗	中国・モンゴル帝国	日本
1238年 蒙古軍第5次高麗侵入 1247年 高麗、モンゴルへの貢納をやめる 1254年 蒙古軍第6次侵入 1258年 蒙古へ降伏 1259年 モンゴル(クビライ政権)に服属。 1270年 高麗「慈悲嶺」以北の広大な東寧路を奪われる。 1271年 忠烈王クビライの皇女、忽都魯揭里迷失(クツルク=ケルミシ)と婚姻の許諾を得る 1272年 忠烈王 クビライに日本侵略を提言。軍船の造船を申し出る 1274年 日本侵略のため、戦艦大小九百艘を造船する。 1287年 元、高麗に征東行省を設立(後期征東行省)高麗王を長官に任命 1297年 クビライの娘忽都魯揭里迷失死去。元との関係が壊れる 1392年 高麗が滅びる	1253年 雲南の大理国、モンゴル帝国に降伏 1257年 ベトナムの陳朝、モンゴル帝国に降伏 1271年 モンゴル帝国のクビライ、国号を大元に改める。首都大都 1274年 元、日本に遠征し失敗 1276年 元のバヤンにより南宋滅亡 1279年 崖山の戦い 1281年 元、再び日本に遠征し失敗 1282年 チャンパ王国、元に降伏 1284年 元、再びチャンパ王国に遠征。その後、チャンパ、陳朝連合軍の抵抗により敗退 1292年 シンガサリ王国に遠征 1294年 クビライ・ハン死去 1361年 朱元璋が南京で大明を建てる	1247年 宝治合戦 1268年 北条時宗が執権に就く 1274年 文永の役 1281年 弘安の役 1285年 霜月騒動 1290年 浅原事件 1293年 平禅門の乱。鎌倉大地震 1305年 嘉元の乱

1347年～
ペスト(黒死病)
流行に着目

感染症の歴史

多数の死者を出した感染症の歴史

主な大流行

1300年より前

アテネの疫病
紀元前430年
推定死者数
10万人

アントニヌスの疫病
165～180年
350万～700万人

日本の天然痘
735～737年
100万人

ユスティニアヌスのペスト
541～542年
2500万～1億人

1300年代以降

ペスト（黒死病）
1347～51年
2500万～5000万人

天然痘（メキシコで流行）
1520年
800万人

ココリツトリ
（メキシコ、腸チフスの可能性）
1545～48年
1500万人

ココリツトリ
1578年
200万人

ロンドンの大疫病
（ペスト）
1665～66年
10万人

マルセイユの
大疫病（ペスト）
1720～23年
4万人

ロシアのペスト
1770～72年
10万人

スペイン風邪
1918～19年
5000万人

ロシア風邪
1889～90年
100万人

アジア風邪
1957～58年
110万人

香港風邪
1968～70年
100万人

● 死者100万人以上*
● 死者100万人未満

AIDS
1981年～
3200万人超

COVID-19
2020年～
13万人超
（4月16日現在）

エボラ出血熱
2014～16年
1万1300人

MERS
2012年～
850人

豚インフル
2009～10年
15万1700～
57万5400人

SARS
2002～03年
774人

*推定死者数は
出典により異なる

© AFP

出典: livescience.com/cdc.gov/ljonline.com/britannica.com/ph.ucla.edu/history.com/ncbi.nlm.nih

流行は500年代、1300年代、1800年代後半の3回あったが特に大規模な流行が2、3回目であり、3回目の流行時での調査でパスツール研究所のアレクサンドル・エルサンはペスト菌の分離に成功

ペストとは

〈語源〉

ラテン語：ペスティス (Pestis)

古来サンスクリット語：ピー (Pvi)

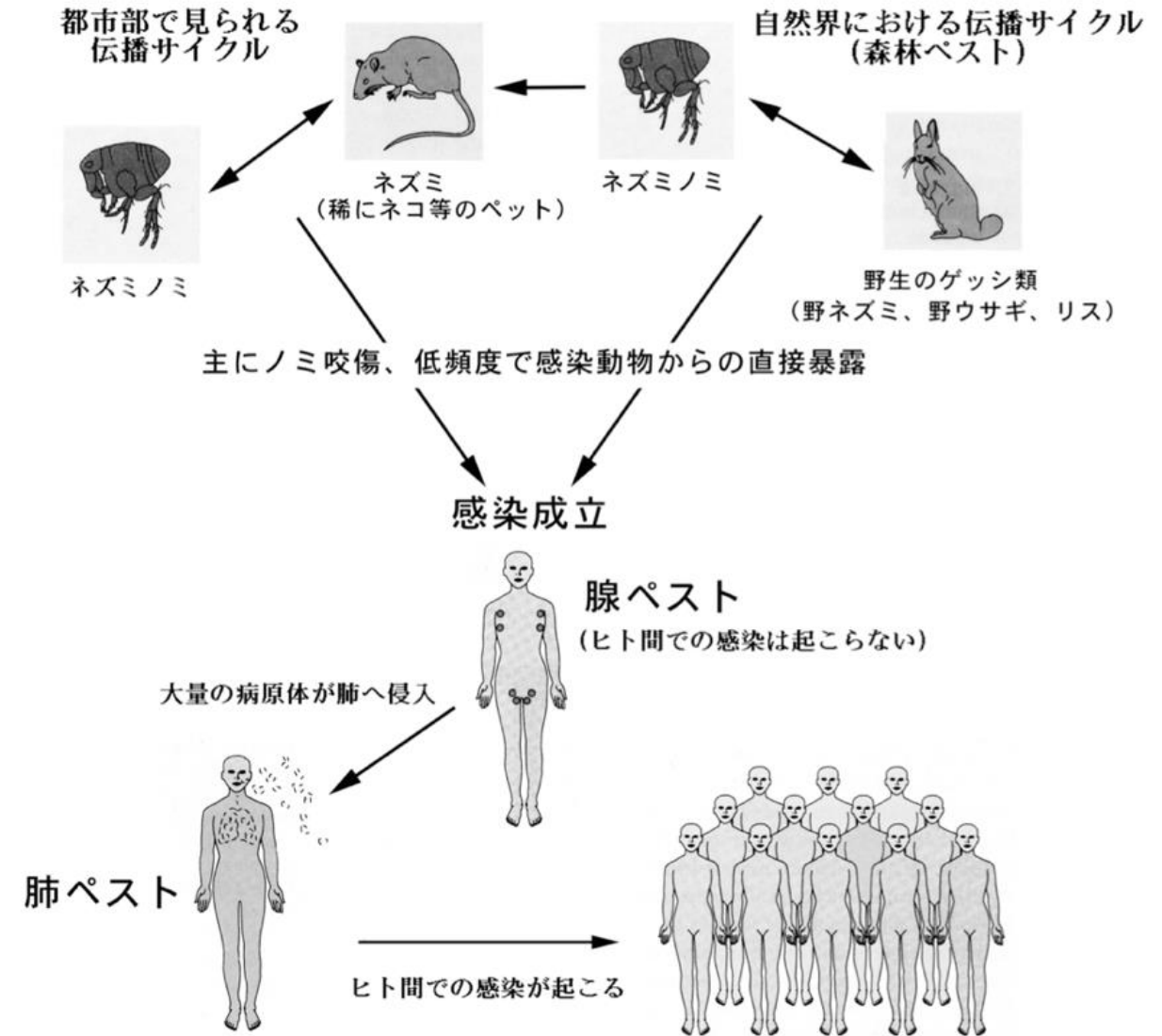
意味は「流行」「破滅」

全世界で二億人が死亡と考えられている

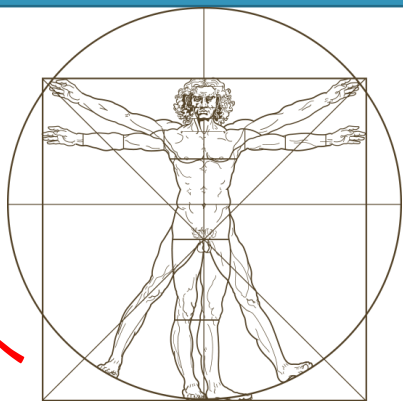
1 エルシニア属細菌の一種，ペスト菌
感染に起因する全身性の侵襲性感染症

2 げっ歯類を保菌宿主
主に節足動物（ノミ等）によって伝播

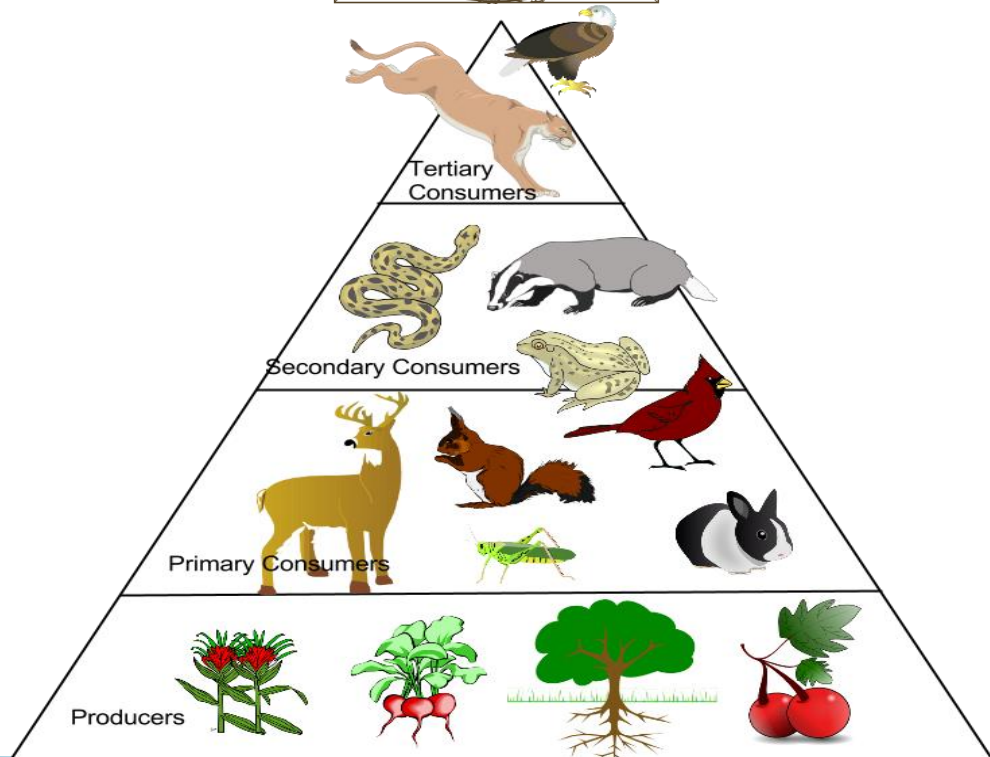
3 腺ペスト（ノミ媒介）、敗血症ペスト、
肺ペスト（空気感染）が感染経路



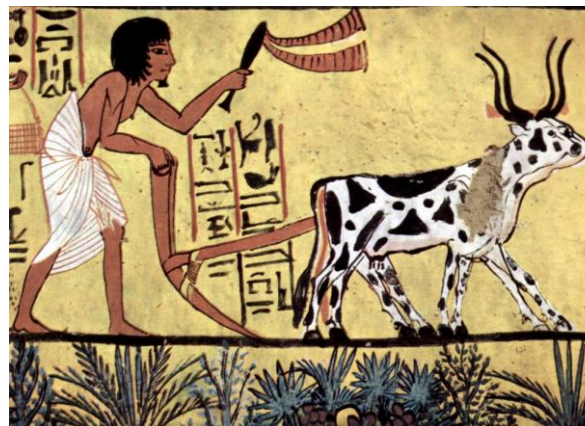
ヒトの進化が及ぼしたウイルス・細菌への影響



ヒト
生態系の頂点へ



Images collected from <http://www.ciker.com>

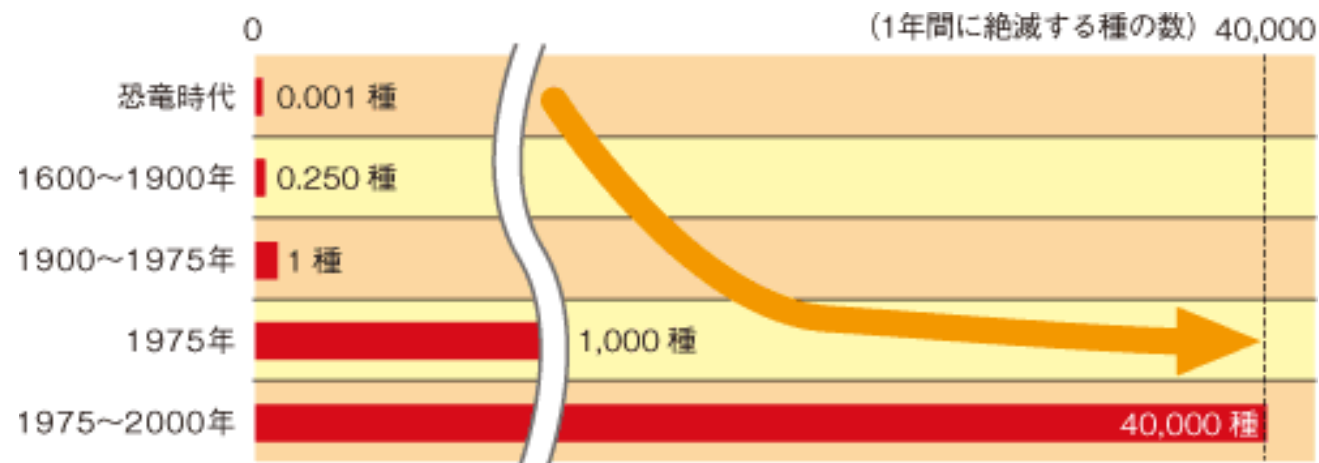


衣服

住居

道具

農耕と畜産により、
地球史各地でヒト増加



資料：ノーマン・ワイヤー著「沈み行く箱船」(1981)を基に作成

ヒト増加は生態系、動植物の分布形態をゆがめ占拠し、
動植物の「種」はより少なく「数」はより多く

文明内で収まっていた従来の感染



「人口集中地域は
ヒトを宿主とする
感染連鎖の確立に
好都合

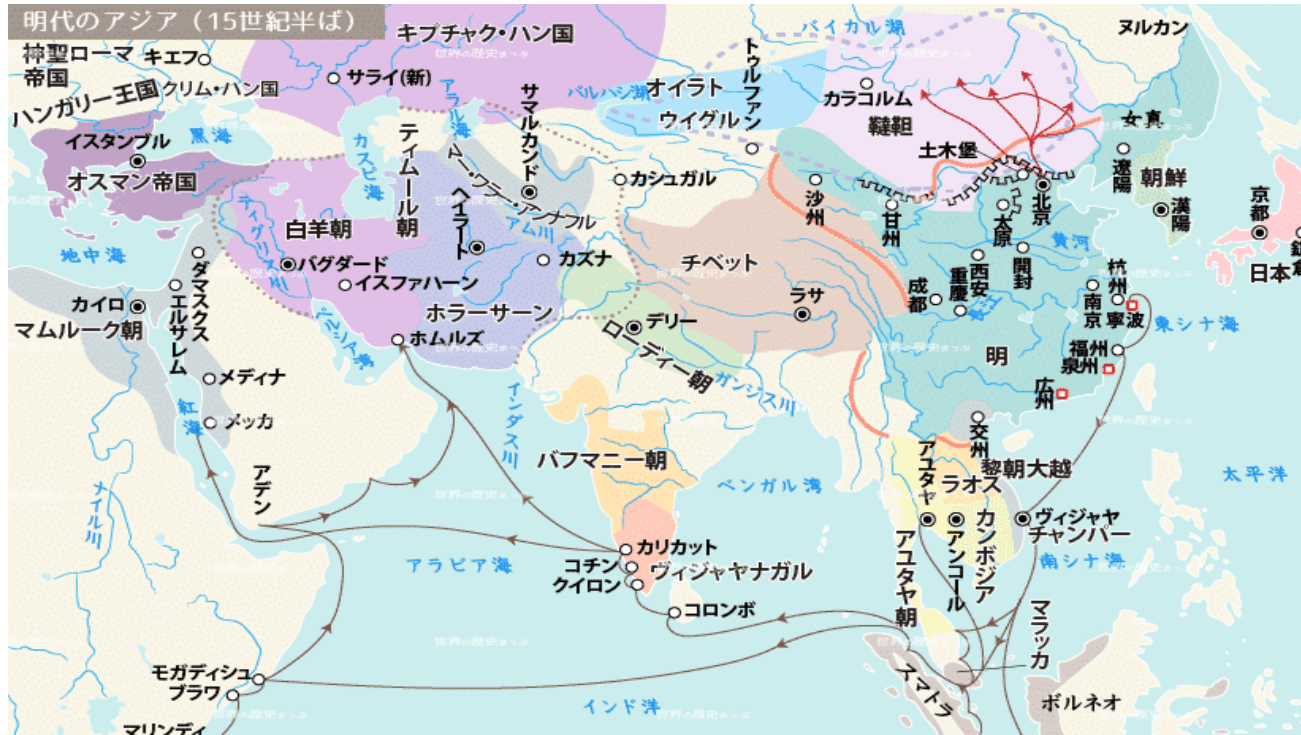
- 人口集中地域では寄生のバランスが整えられていた。
- 文明間同士の定期的な何らかの安定した組織的な機構はなかった
⇒ 感染症が広がる機会はごく稀だった

ウイルスと細菌の違い

	ウイルス	細菌
大きさ	10nm $\frac{1}{10}$ 100nm $\frac{1}{10}$ 1μm $\frac{1}{10}$ 10μm $\frac{1}{10}$ 100μm $\frac{1}{10}$ 1mm ウイルス (100nm) 細菌 (1μm) ヒトの赤血球や白血球 (10μm) ゾウリムシ (100μm)	
核 酸	DNAかRNAのどちらか一方しか持っていない	DNA、RNAを両方持つ
増 殖	単独では増殖できない。宿主の細胞に侵入し増殖	細胞が二分裂して増殖
主な病原体【感染症】	コロナウイルス【かぜ、呼吸器症候群】、インフルエンザウイルス、ヘルペスウイルス、ノロウイルス、ポリオウイルス、HIV【エイズ(後天性免疫不全症候群)】	百日咳菌、結核菌、ヘモフィルスインフルエンザ菌b型(Hib=ヒブ)、ブドウ球菌、大腸菌、コレラ菌、赤痢菌
治 療	抗生物質(抗菌薬)が効果を示さない。治療薬に限られる	細菌の特徴に合わせたさまざまな抗生物質がある

ペストは細菌

世界に拡散したペスト（黒死病）



ドイツのMichael Wolgemut (1434-1519)、1493年作
「Tanz der Gerippe」(死の舞踏)

13～14世紀…疫病の時代(モンゴルとその後)

15世紀 ……祈っても神は助けず

- 科学による神学の乗り越え(ルネサンス)
- 人口減を補う技術開発(産業革命の萌芽)

“ペスト菌の発見”

1894年(明治27年)6/14

流行下の香港で北里柴三郎が発見

直後、同じく香港で

アレクサンドル・エルサン(A. Yersin)も発見

🏆 栄誉は雑菌を分離して発表した
アレクサンドル・エルサンのものに



北里柴三郎(1853–1931)
資料/学校法人北里研究所



アレクサンドル・エルサン
(Alexandre Yersin, 1863⁵⁷–1945)

問題意識 計20件

1. モンゴル帝国とパンデミック

- ①ウイルスや細菌との共生と国家維持の間に相関はあるか(半田)
- ②モンゴル帝国内の感染が引き起こした変化とは(生田)

2. 欧州のパンデミック

- ①ペスト(黒死病)後の人口減少の影響と、産業構造の変化について(三田)
- ②ペスト(黒死病)が中世欧州の芸術に与えた影響について(小出)
- ③ユダヤ人迫害の原因と宗教的背景について(桑原)
- ④ペスト(黒死病)の感染拡大の原因と対策(池田)
- ⑤なぜ欧州人はキリスト教を棄てなかったのか(北山)
- ⑥なぜユダヤ人迫害は起こり、後世にどのような影響を与えたのか(北山)

3. パンデミックの日本への影響

- ①日本の熱心な神仏信仰の裏には、実は疫病が大いに関係していたのではないか(山内)
- ②14世紀ペスト(黒死病)が伝播しなかったことと日元貿易の関連性、15世紀梅毒が伝播したことと日明貿易・倭寇との関連性の違いはあるのか。(光永)
- ③モンゴル帝国の属国であった高麗に、14世紀ペスト(黒死病)が伝播しなかったのはなぜか、日本との違いは何か。(光永)
- ④モンゴル帝国の侵攻を退けた日本とベトナムであるが、14世紀ベトナムはペスト(黒死病)に侵され、日本は防げた要因は、往来や貿易の違いにあるのか。(光永)
- ⑤江戸時代までの日本人は感染症に対しどのような意識を持ち、どの程度の危機感を持っていたのか、具体的な感染症対策は何だったのか。(柳沢)
- ⑥江戸時代「4つの口」と感染症の関連性はどのようなものか。(柳沢)
- ⑦日本人の自然観と海外の自然観の違いによって、感染症の広がりには関係性があるのか。(古川)
- ⑧感染症の病原体特定やワクチン・治療薬開発に、日本人はどれだけ貢献したのか(光永)